

湯舟沢遺跡 3 区の弥生式土器

岩手県立博物館 小田野 哲憲

はじめに

岩手県において同一遺跡から複数の、弥生時代に属する竪穴住居址が発見された例は極めて少なく、おそらく一戸町上野B遺跡（小田野・高田：1983，高田：1985他）、軽米町馬場野II遺跡（註1）、君成田IV遺跡（遠藤他：1983）、小井田III遺跡（近藤他：1985）に次いで5例目であろう。しかも本遺跡では、量の多寡はあるが各竪穴住居址より良好な資料がまとまって出土している。前章でも触れているが、これらの弥生式土器は竪穴住居址から出土したものが最も多く、土器と竪穴住居との関連を知る上でも貴重である。弥生時代と判明している18棟の住居址は、プラン上においては2形態に分類されるが、時期的には3分類が可能であり、伴出する土器も同様の分類が可能である。竪穴住居址は次の特徴により、III型に分類される。

I型：プランはほぼ円形で、柱穴は壁際にある。直径は4.3m～9.3mとバラツキが多い。炉は「二」字状の石囲炉と地床炉とがある。この型に属する竪穴住居址はVII Je—2・VII Jf—1・VII Jf—2・VII Jk—1・VII Jk—2・VII Jl・VII Jo・VII Kiの8棟である。

II型：プランは円形・楕円形の両者が半々で、柱穴は炉と壁の中間に4～5個ある。壁際に小ピットがめぐる例もある。径は5.7m～9.5mであり大形のものが多い。炉はI型とほぼ同様である。この型に属する竪穴住居址はVII Ia・VII Ja—1・VII Jc・VII Jg—1・VII Ji・VII Jmの7棟である。

III型：プランは円形で、柱穴はI型と同様壁際にある。径は4.5m～5.7mで小形化している。炉は、1例判明しているが地床炉である。この型に属する竪穴住居址はVII Ib・VII Ic・VII Ifの3棟である。

竪穴住居は以上の3型に分類できるが、次にはこれらI～III型から出土している土器の概要について述べる。記述の都合上、I型竪穴出土土器を「湯舟沢I類」・II型竪穴出土土器を「湯舟沢II類」・III型竪穴出土土器を「湯舟沢III類」土器とよぶ。

1. 湯舟沢I類土器（第175図）

（1）器種

壺・甕・鉢（深鉢・小形鉢・浅鉢）・高坏・蓋が出土している。

〔壺形土器〕

概して小形のものが多く、最も大きい例で高さ34cmを計るが、ほとんどのものは器高20cm以下で、最小の例は約8cmである。数量は少ない。変形工字文(VII JI 住-17)や口縁部粘土帯貼付文(VII Jk-1 住-1)の文様の他は縄文を施す例が多い。

〔甕形土器〕

各竪穴住居址から出土しており、数量的にも最も多く出土している。ほとんどの資料が器高30cm以上である。最大径が口縁部にあるものと肩部にあるものとの両者あるが、数量的には後者が多い。無文の口縁部と沈線に区画された頸部・縄文をもつ体部が一般的である。口縁部は平縁・波状・山形の3種に分けられるが、平縁が最も多い。多くのものが煮沸に用いられており、器内外面に煤・炭化物の付着がみられる。

〔鉢形土器〕

深 鉢：縄文時代晩期の深鉢の伝統を強く残している大形の深鉢で、口縁部がやや内傾する(VII Je-2 住-4・VII Jf-2 住-2 他)。同様の器形は一関市谷起島遺跡(林・小田野：1977, 工藤：1984他)で知られている。

小形鉢：甕形土器をそのまま小形化した器形が最も多く、文様についても同様である。1例のみ当遺跡では珍しい二重の構造をもつ変形工字文をもつものがある。他に数例袖珍土器(VII Ki 住-3 他)がある。

浅 鉢：数量的には少ないが特徴的なものが多い。特に体部に段を有する器形(VII JI 住-2)は本県に類例の少ない資料で、前記谷起島遺跡で少数知られているのみである。

〔高坏形土器〕

甕に次いで数量が多い。坏部は碗状のもの・浅鉢状のもの・頸部を有するものの3形態があり、口縁部は平縁・山形及び刻み目を有する三者がある。脚部はほとんどが筒形である。坏部は各種の変形工字文が施され(詳細は後述)、脚部は上下の平行沈線文の間にゆるやかな波状文をめぐらす例が最も多い。

〔蓋形土器〕

数量的には多くない。ほとんどが倒碗形である。VII Jk-2 住居址出土例(VII Jk-2 住-2)は底部中央にいわゆる蒸気口があいている。明瞭に蒸気口と確認されたものはこれが岩手県で初めてである。

(2) 文様

縄文を除いてはほとんどが篋描き沈線による文様である。この中で最も多くバラエティに富むのは変形工字文である。

〔縄文〕

ほとんどが2段単節のLRであるが、少量RLも存在する。横走・斜行するものが多いが、中には縦走する例（VII Ij 住—4）もみられる。

〔変形工字文〕

高坏に最も多く使用されている。高坏以外では小形鉢（VII JI 住—3，VII Jo 住—1）・壺の胴部（VII JI 住—17）の3例のみである。種類については模式図（挿図1～2）に示すとおり様々な変化がみられる。

〔波状文〕

I 類土器では高坏の脚部に1～3本の単位で施文されるのみであり、変化に乏しいのが特徴である。

〔平行沈線文〕

各器種の文様帯を区画するものとして多用されている。特に高坏に著しいが、高坏の中には変形工字文でなく、口縁部と体部にそれぞれ数本をめぐらす例が多いのも特徴の一つである。胴部に段をもつ浅鉢（VII JI 住—2）もこの類に入る。壺・鉢の口縁部文様としても少数みられる。

〔刺突文〕

高坏脚部（VII Jf — 1 住—21～24，同一個体）にみられる他は口縁部の突起を突く程度である。

〔磨消縄文・充填縄文〕

数量的には少なく、高坏形土器にのみ見られる。坏部においては、変形工字文の外側に施す磨消縄文と変形工字文内に施す充填縄文の2種類がある。脚部のそれは少なく1例のみである（VII Jf — 1 住—18）。

〔丹塗り〕

図示した資料（完形品も砂片も1点と計算して）のみで見ると、高坏に圧倒的に多く約82%、次いで浅鉢が多く44%、これに壺32%と続き、甕・深鉢3%、蓋0%の数値を示している。

以上にみられるようにI 類土器は何らかの形で文様あるいは装飾を有しているが、その種類・手法については限られている。

2. 湯 舟 沢 II 類 土 器 （第176図）

（1） 器種

壺・甕・鉢（小形鉢・浅鉢・台付鉢）・高坏・蓋が出土している。

〔壺形土器〕

I類土器と同様やや小形のものが多く、中には有文精製の大形壺もある（VII Ja—1住—6）。I類の壺よりは器形が豊富で、最大径が胴部中央にあるものが多い。文様も縄文のみではなく各種の篋描沈線文が胴部中央あるいは下半部まで及んでいる。II類土器での数量としては少ないが、I類土器の壺の割合よりは勝っている。

〔甕形土器〕

I類土器と同様数量的には量も多い。ほとんどのものは30cm以上であるが、40cmを越えるものはない。最大径は口縁部にあるものと肩部にあるものとの両者あり、数量的にはほぼ同じ割合である。I類土器と同様頸部に1～3本の沈線をめぐらすものの他に、沈線をもたない器形が多くなっている。口縁部は平縁のものが最も多く、波状・山形はI類土器よりは少なくなり、波状は間隔が浅く、山形はよりゆるやかになってきている。また、全く文様をもたない甕が出現するのも大きな特徴である。この種の甕は最大径が口縁部にあり、頸部のくびれが強く、口縁部が強く外反するものが多い。また、他の甕に比較して、頸部から口縁部までが長いのも特徴の一つである。器面は荒い篋整形である。岩手県北部から青森県にかけて分布する甕と同じ器形・文様をもつものがある（VII Ij 住—4）。体部上半の沈線文の一部を区切る方法、縦走る縄文がよく特徴をあらわしている。竪穴住居址の出土であり、本県と青森県との当該時期を比較する上で貴重な資料となろう。

〔鉢形土器〕

小形鉢：甕をそのまま小形化したような器形（VII Ji 住—13, 14, VII Ia 住—4, 5）と小さな波状口縁をもつもの（VII Ia 住—3）の他に袖珍土器がある（VII Ia 住—12～14）。

浅鉢：数量的には少ない。ただし、高坏形坏部と分類した資料の中には浅鉢となり得る可能性をもっているものもある（特に平行沈線文のみ破片は）。形のはっきりしている浅鉢は3点（VII Ja—1住—3・VII Jg—1住—1・VII Ji 住—5）で、前二者は相似た特徴をもっている。

台付鉢：II類になって初めて出現する器形である。全体を知り得る資料はないので、あるいは台付甕となるものを含んでいる可能性がある。小形の台付は1例のみで（VII Ji 住—12）、「の」の字を重ねたモチーフをもつ。他の台付は比較的大きな粗製で、いずれも1ないし2本の沈線がめぐる（VII Ja—1住—9・VII Ia 住—33）。

〔高坏形土器〕

I類土器と同様出土頻度の高い器種であるが、I類土器に占める割合よりは減少している。坏部は頸部をもつものがほとんど姿を消し、碗形を呈するものも少なくなり、浅鉢状を呈するものが大勢を占める。口縁部は平縁が最も多く、山形がこれに続き、小突起は少なくなる傾向にある。脚部はI類土器と同様筒形であるが、これより細い脚も出現する。文様は変形工字文

以外の多様な磨消縄文が用いられる。

〔蓋形土器〕

I 類土器よりは減少している。明確に蓋と言えるのは 2 例のみ (VII Jc 住-4・VII Ji 住-25) で他の 1 例 (VII Ia 住-9) は高坏とも言える器形であるが、脚部の形状及び体部のモチーフから判断して蓋形土器に分類した。

(2) 文様

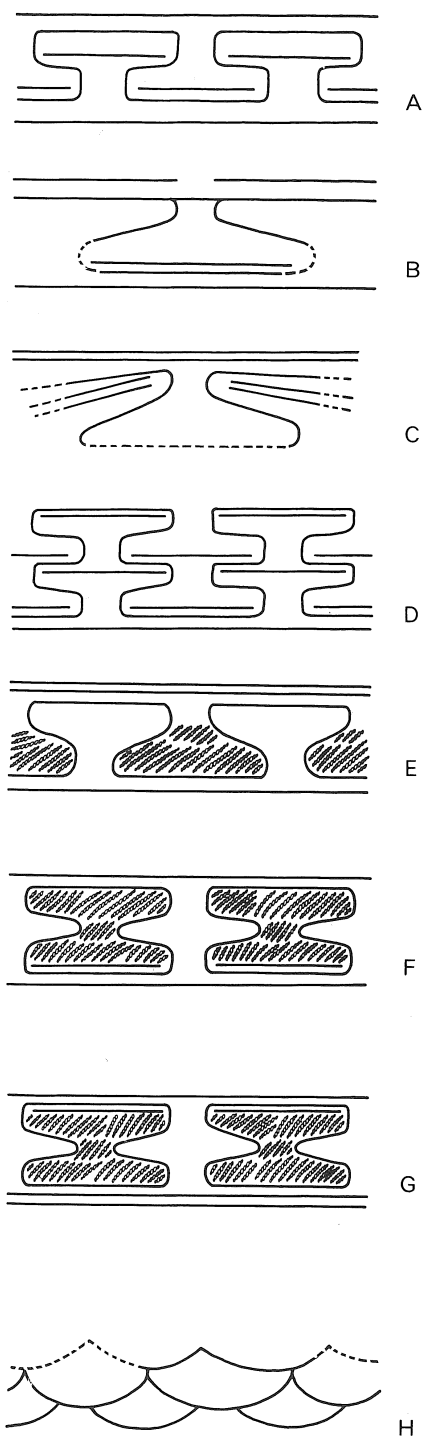
I 類土器と同様、縄文と篋描き沈線によるものがほとんどである。

〔縄文〕

ほとんどが 2 段単節 LR である。横走・斜傾するものが多いが、甕・鉢の中には縦走するものがあらわれる (VII Jc 住-5・6, VII Ia 住-33)。

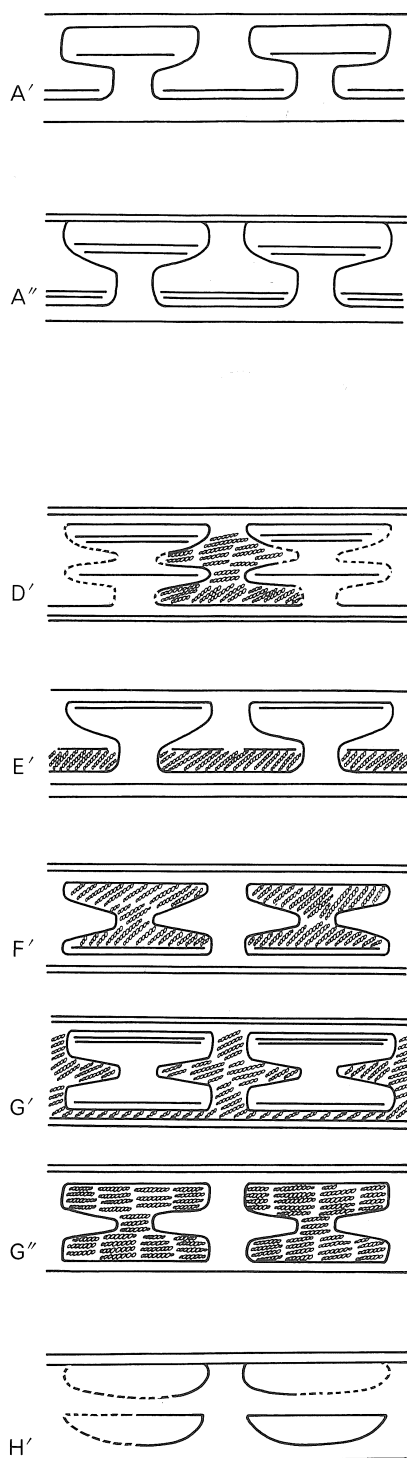
〔変形工字文〕

I 類土器と同様に文様の主体を占めているが、種類は減少し、それに替るものとして王字文などが出現する。I 類土器の変形工字文と II 類土器の変形工字文を模式図化したのが挿図 1 (湯舟沢 I 類) と挿図 2 (湯舟沢 II 類) である。I 類土器では、A～E にみられるように横に連なるモチーフが多く、F・G のように縦方向に完結するモチーフ (工字文) を有するものは極めて少量である。と同時に、磨消あるいは充填縄文をもつ変形工字文も少量である。II 類土器では、文様帯の上・下限を区画する平行沈線の数の違いはあるが、A'・F' のように I 類と全く同じモチーフも残存している。その一方で I 類土器にはみられなかった変形工字文があらわれる。D と D' は A タイプのモチーフを二つ重ねて横に展開した文様であるが、モチーフ内の横線



湯舟沢 I 類

挿図 1



湯舟沢Ⅱ類
挿図 2

の数・縄文の施文などに差異が認められる。EとE'では、Eには無かった途中で切れる横線が下に、普通の横線が上に引かれているなどの変化が認められる。同じことは工字文にも言えることで、Ⅰ類においてはモチーフ内の横線が上あるいは下に引かれて縄文が施文されているが、Ⅱ類になると横線の無いものや、逆に増えたりするものや、G'のようにモチーフ内を磨消すなどの変化があらわれる。Ⅱ類土器の中でも、特に高坏では磨消縄文・充填縄文の多用化及びF'・G'にみられるような工字文が目立って多くなる。

〔垂下文〕

典型的な垂下文は数少なく、竪穴住居址から出土したのは1例のみである(VII Ia 住-30)。他に遺構外から出土した壺(遺構外-63)・高坏(遺構外-83)に例がある。ただし、挿図3—Lタイプの文様も垂下文に加えると類例は増加する。

〔連弧文〕

壺の一部(VII Ja—1 住-6・VII Ia 住-15)と蓋(VII Ia 住-9)にみられるが数は少ない。上向きと下向きの両者がある。

〔山形文〕

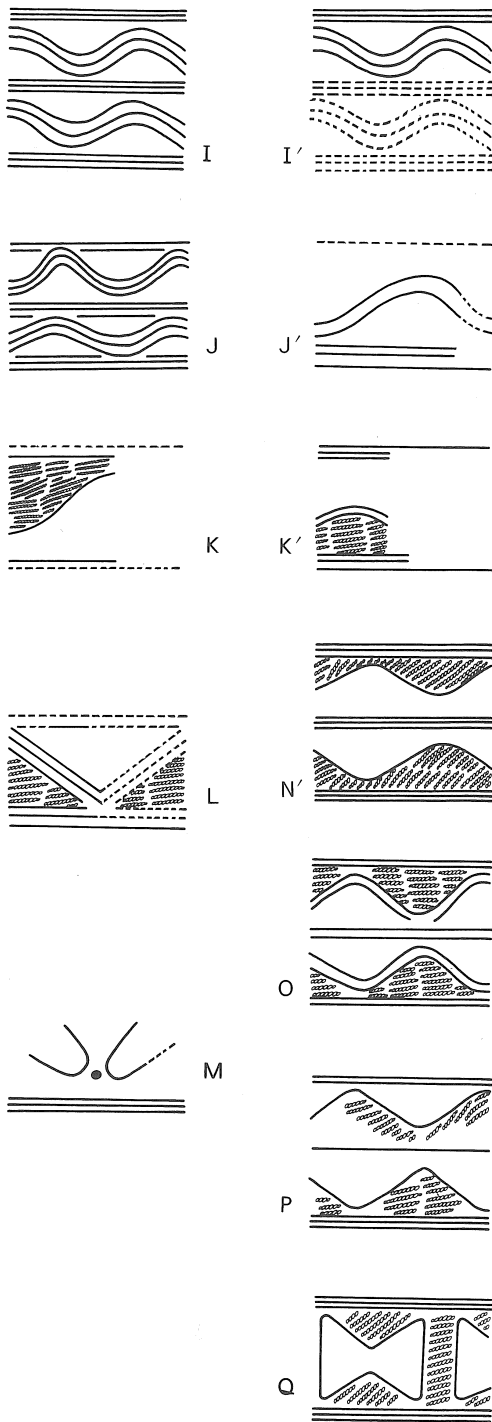
篋描き沈線の一部を故意に山形にした例がある(VII Ji 住-3)。明確な連続山形文は、遺構外出土資料の中にある(遺構外-68~73)。

〔列点文〕

前述の蓋(VII Ia 住-9)に3段にわたって認められる。これ1例のみである。

〔刺突文〕

甕に数例ある。口縁部で複合口縁の下方を一



湯舟沢Ⅰ類

湯舟沢Ⅱ類

挿図 3

周するもの (VII Jc 住-6) と口唇部を一周するもの (VII Jg-1 住-2) 及び、平行沈線の一部を切る刺突 (VII Ij 住-4) がある。

〔重菱形文〕

刺突文をもつ甕 (VII Jc 住-6) の頸部にあり 2 本の沈線をはさむ形で上下の山形が菱状を示す。

〔平行沈線文〕

文様帯の上、下限を区画するものとして用いられる以外に、壺や鉢に多用されている。高坏においては、平行沈線のみの施文も目立つ。

〔波状文〕

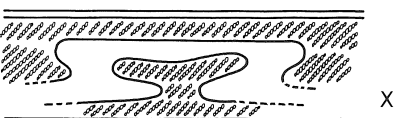
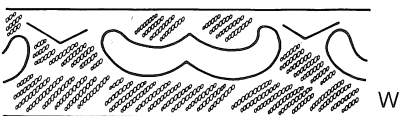
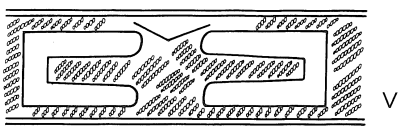
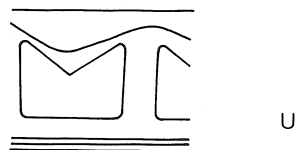
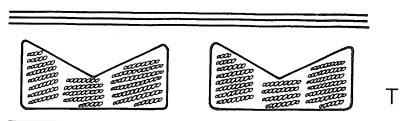
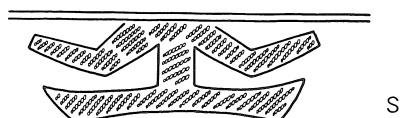
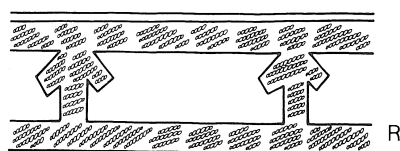
I 類土器においては高坏の脚部のみに施文されていたが、II 類土器になり壺形土器 (VII Jc 住-1・VII Ji 住-1) の体部にも用いられるようになるが、高坏の坏部に施文されている例は無い。また、I 類と異なり数種類の波状文があらわれるのも特徴の一つである。I 類土器と II 類土器の高坏脚部の波状文を模式図化したものが挿図 3 である。I タイプは II 類の時期となっても残存しているが、I 類よりは減少している。かわりにこのタイプから変化した様々な波状文が出現する。I 類では上・下 3 本の平行沈線により文様帯を区画し、さらに 3 本の中心線を描き、その中に波状文をめぐらすが、II 類になると中心線は 1~3 本の沈線で描かれ、波状文も 1~2 本となり (J'・K'・N~P)、途中で切れる O タイプのような例もある。と同時に、I 類土器では稀であった磨消縄文が多用されるようになるのも大きな特徴である。脚部にこのような文様をもつ高坏の坏部は、当然のことながら磨消・充填縄文が施文されている。

〔磨消縄文・充填縄文〕

I類土器と比較すると、かなり増加している。I類土器では高坏の一部にみられるだけであったが、II類土器では高坏の半数以上の個体が磨消あるいは充填縄文をもつ。また、壺・台付鉢（VII Ji 住-12）、蓋（VII Ia 住-9）にも施文されている。壺では波状文・連弧文・工字文・コ字文（VII Ji 住-2）などが描かれている有文精製土器のほとんどが磨消縄文をもっている。高坏ではさらに種類が豊富で、その代表的な模式図が挿図4である。T・Uタイプのモチーフは、本県の今までの例からすると高坏脚部に多くみられるが、湯舟沢では坏部にも施文されている。他の遺跡ではこのモチーフが縦に、あるいは上下逆に付されていることもある。Qタイプ（挿図3）を含めたこの三者は、よくみられるモチーフの一つである。R・Sタイプは、本県では初めてあらわれたモチーフであるが、Rは垂下文の、Sは工（王）字文の系統を引くものと考えられる。Wタイプは碇文（註2）の変化したもののようにも受け取れる。V・Wタイプとも主要モチーフの間に「V」形の沈線をもつが、この文様もこの時期に初めてあらわれるが、その分布は県内各地に及んでいる。湯舟沢II類の磨消縄文は、それまでの変形工字文・波状文などと同じモチーフを残す、あるいはその系統を一部引いている一方で、そこから新たに生み出したモチーフも多いに活用している。

〔丹塗り〕

図示した資料（全てを一点と計算して）のみでみると、高坏90%・壺50%・蓋50%・浅鉢25%・甕5.3%の数値を示す。これをI類土器と比



湯舟沢II類

挿図 4

較すると相対的にパーセンテージは高くなっている。その中でも高坏のほとんど、壺の半数が特に顕著である。

〔その他の文様〕

甕・小形鉢の底部に数例網代痕が認められる。いずれも単純な一本潜り・一本送り（坪井：1899）である。この他に木葉痕もあり、I類に比べると底部文様をもつ例は多い。

3. 湯 舟 沢 III 類 土 器 （第177図）

（1） 器種

壺・甕・鉢（小形鉢・浅鉢）・高坏・蓋が出土している。

〔壺形土器〕

I・II類に比較して数量は減少している。肩をもつ小形のもの（VII If 住一1）・球形の胴部と推定される磨消縄文をもつ中形のもの（VII Ib 住一1・2）と・頸部からなだらかに胴部につらなる大形のもの（VII If 住一2）が出土している。特に大形の壺はこれまでに例の乏しい資料で、おそらく最大径は胴中央部よりは下に位置する器形と推定される。丹彩され、成形も丁寧になされている。

〔甕形土器〕

III類土器はほとんどが甕形土器で占められている。形態もバラエティに富み、かつ大形のものが多く、器高40cmを越えるものも少なくない。II類と異なり無文の甕はなくなる。形態の上からは、最大径が胴中央あるいは下半部にある一群と、頸部が比較的ゆるやかで口縁部が大きく広がり、そこが最大径となる一群とに分けられる。平縁を呈するものが最も多いが、小さな突起をもつ例（VII If 住一7・9）や、ゆるやかな波状を呈する例（VII Jc 住一1・VII If 住一10）もある。複合口縁が出現するのもこの時期からであるが、複合部分はそれほど肥厚はしていない。この類の甕は口縁部と体部に文様があり、頸部を無文とするのが一つの特徴のようである（VII Ic 住一3・VII If 住一3・7・19）。底部はやや上げ底風のものが多く、底縁部が少し外側にはみ出すのが特徴の一つでもある。大きさの割には器壁が薄く、固い焼成のものが多い。文様帯は前記の頸部無文となるもの以外に、口縁部が無文で頸部以下に文様のあるもの、全面に施文するものなど様々である。

〔鉢形土器〕

小形鉢：広口壺状の鉢が1例ある（VII Ib 住一3）。甕よりは器壁が厚く、丁寧な成形で刺突文と沈線文をもつ。

浅 鉢：異形の浅鉢で（VII If 住一11）真上から見ると不正楕円形を呈する。底部は欠損して

いて不明である。一戸町上野遺跡（高田：1984）に類例があるが、丸底の底部である。口縁部の沈線は壺形土器（VII If 住一1）のそれと相通じるところがある。

〔高坏形土器〕

I 類・II 類土器と比較して極端に数の減少する器種である。3 例（VII Ib 住一12～14）とも II 類の器形・文様をそのまま引き継いでいる。いずれも丹塗り。

〔蓋形土器〕

VII Ib・VII If 住居址から 1 点ずつ出土している（VII Ib 住一11・VII If 住一12）。倒碗形と笠形と推定される。器形・成形・文様が良く似ている。

（2） 文様

縄文・撚糸文・篋描沈線・刺突文が主体を占める。

〔縄文・撚糸文〕

III 類土器の地文に用いられている縄文、あるいは撚糸文は複雑な施文方法がとられている。縄文では 2 段単節の LR・RL 両者が用いられているが、数量的には RL が多い。また原体の中には縄の周囲に他の条を巻き絡らげたいわゆる附加条（山内：1979）を用いているものも多い。結節回転文・絡条体圧痕文も多く用いられている。明瞭な帯縄文は見られない。器内面あるいは底部に縄文をもつ例も若干ある（VII If 住一16・17・2・35）。条は角度の強い斜行あるいは縦走するものが多いが、底部付近で末端が交叉するものはほとんど無い。が、頸部から胴部にかけて、あるいは口縁部で羽状縄文風に上下に配列している例は多い（VII Ic 住一3～4・VII If 住一3・10他）。また、底部付近で原体を連弧文状に施文している例もある（VII If 住一3）。

〔交互刺突文〕

III 類土器を代表する文様の一種であるが、VII If 住居址のみと遺構外の資料に限られている。極めて明瞭な交互刺突文で、退化したものは見うけられない。甕の口縁部あるいは頸部付近に 1 段か 2 段めぐらすが、一周せずに段違いになる例もある（VII If 住一3 他）。器面を直接交互に刺突する例と、粘土紐を貼りつけてそれを刺突している例の両者がある。

〔連続山形文〕

雑で不定形化した形ではあるが、口縁部あるいは頸部をめぐる。壺の山形は 1 本のみで（VII If 住一2）、甕のそれは 2 本一単位あるいは 3 本一単位となっている。（VII If 住一5・16・17）。

〔連弧文〕

連続山形文と組み合わせて用いられている例（VII If 住一2）、重連弧文が上・下に連なる例（VII If 住一4）と原体の回転によって連弧状をあらわしている例（VII If 住一3）とがある。

〔変形工字文〕

甕の体部上半に変形工字文もしくは流水文状の複雑かつ不定形な文様をめぐらせている（VII If 住一31他）。破片資料のみで正確なモチーフ、単位は不明である。他にII類の系統を引く変形工字文が高坏に見られる（VII Ib 住一12～14）。

〔刺突文〕

磨消縄文の部分を残す1例（VII Ib 住一1）のみある。

〔列点文〕

小形鉢に一例ある（VII Ib 住一3）。上下を沈線に区画された中を、3段にわたって横方向に突いている。

〔その他の沈線文〕

不定形化された連続山形文に区画された文様帯中に、モチーフが把握できない例（VII Ic 住一1）がある。他に類例は出土していない。おそらく青森県垂柳遺跡（伊東：1960）や宮城県西台畑遺跡（伊藤：1958）あるいは一関市谷起島遺跡などにみられる碇文の退化した形ではないかと推定される。

〔丹塗り〕

I・II類土器と比較して丹彩される数は少ない。VII Ib 住居址の高坏片3点を除くと、壺3例中1点、甕40例中3点に認められるだけである。

4. 遺 構 外 出 土 の 土 器 （第178図）

遺構外出土の土器は既述した湯舟沢I～III類土器の範疇からはみだすものはほとんど見当たらない。ただし、その中でいくつか興味のある資料が散在しているので、時期に関係なく器形の上から特徴を述べる。

〔壺形土器〕

肩部に2本一単位の連続山形文をめぐらす壺（遺構外—1）は、県内では類例の乏しい資料であるが、盛岡市繫VI遺跡（註3）で出土している。他の壺（遺構外—25～29）はI～II類で見られる器形と文様である。II類に含まれるものの中には垂下文（遺構外—63）や有文精製の大型壺も存在する。

〔甕形土器〕

いずれもI～III類に含まれ、前述の堅穴住居址のものと同様の例が多いが、やや異なる資料もある。いずれも口縁部が強く外反する器形で（遺構外—65・74）、両者とも県内で類例の少ない資料であり、かつ県内の弥生式土器の中から生ずる器形でもなく、他の地域特に宮城県地方

あるいは更に南の地域の影響を強く受けているものと考えられる。特に65の資料は成形も秀れ丹塗りが認められるなど、他の甕とはやや異っている。

〔鉢形土器〕

甕と同様、特徴的な資料が2例ある。沈線間に横長の方形をめぐる鉢（遺構外—3）と頸部以下に鋸歯文を配する鉢（遺構外—68～70）である。前者は王字文あるいは工字文のモチーフをひくものであるが、他地域では磨消縄文を伴うのが通例であり、紫波町上平沢新田（吉田・千葉：1980）の例も同様である。ただし、当遺跡では縄文を伴っていない。後者は数少ない台付鉢であり、県北あるいは青森県地方の関連をうかがわせるもので、田舎館2あるいは3群（須藤：1983）に位置づけられる資料であろう。

〔高坏形土器〕

1例（遺構外—12）を除いては一般的に見受けられる器形・文様である。12はあるいは台付鉢とすることも可能であろう。頸部をめぐる円形の刺突文・体部の変形工字文の継ぎ目にある刺突文及び特徴的な器形は、岩手県にはほとんど類例がなく、青森県地方の二枚橋式（須藤：1969）あるいは宇鉄Ⅱ式（岩本・三宅他：1979）に同類を求めることができる（註4）。

〔蓋形土器〕

I～Ⅲ類と同様、笠形と倒碗形（小田野：1983）のみで、それ以外の器形のものは出土していない。

〔その他の土器〕

底部に倒皿状の蓋のモチーフをもつ例（遺構外—33）があるが、穿孔もなく底部と判断した。他に器内面に複数の沈線をもつもの（遺構外—91）や杓痕をもつ甕（遺構外—124）などが出土している。

5. 湯 舟 沢 I ～ Ⅲ 類 土 器 の ま と め

（1） 湯舟沢Ⅰ類土器

湯舟沢Ⅰ類土器に類似する土器は県内各地で発見されている。最も資料が豊富な一関市谷起島遺跡（鳥畑：1955、林・小田野：1977、工藤：1982他）をはじめ、金ヶ崎町長坂下遺跡（伊藤：1965）、花泉町中神遺跡（伊東：1974）、江刺市沼の上遺跡（伊藤：1973、山口：1978）同市兔Ⅱ遺跡（高橋他：1979）、江釣子村蔵屋敷遺跡（高橋：1983）、松尾村長者屋敷遺跡（三浦他：1984）、二戸市火行塚遺跡・同大淵遺跡（高橋・遠藤：1981 a・b）、軽米町馬場町Ⅱ遺跡（註5）など、北上川・馬淵川沿いの地域を中心に分布している。他に少量の遺物を出土した遺跡まで含めると相当量の遺跡数となるが、北上山地・奥羽山脈・海岸部は類例に乏しい。

壺形土器の数は少ないが小形壺は谷起島遺跡に、口縁部に隆帯をめぐらす例(VII Jk—1住—1)は長坂下遺跡や蔵屋敷遺跡に類例を求めることができる。後者の壺は縄文式土器の伝統を強く残しているものである。同様のことは甕(深鉢)形土器・高环形土器にも言えることで、甕においては縄文式的な例(VII Ki住—4・VII Je—2住—4・VII Jf—2住—2他)とこの時期に新たに出現する器形(VII Jk—2住—5・6他)とに分けられる。高環においては、大洞A'式の伝統の強い山形あるいは大きな突起をもつ口縁部と、ややふくらみをもつ坏部のタイプ(VII Jf住—8・VII Je—2住—3・VII Jk—1住—3他)と筒状の脚部、坏部にくびれがなくそのまま外に開くタイプとに分けられる。磨消縄文あるいは充填縄文をもつものは少ない。また、口縁部に大突起をもつ例や変形工字文の端に2個の粘土瘤を貼り付ける例はほとんどない。小形有文の鉢形土器が少ないこともI類土器の特徴としてあげられる。蓋形土器は明らかにこの時代になり出現する器形であるが、本遺跡で蒸気孔をもつ例が初めて出土した。器形は笠形と倒碗形がほとんどで、倒皿形は出土していない。蓋は北上川中流域の遺跡では全器種に占める割合は高い方であるが、上流域あるいは馬淵川流域ではそれほど頻度は高くないようである。

県内の資料との比較は以上であるが、I類土器は他の地域との比較資料としても良好な土器が出土している。VII Jhの高環(遺構外—12)はおそらく青森県地方の二枚橋式(須藤:1969)あるいは宇鉄II式(岩本他:1979)に相当するものと考えられる。他の土器との供伴関係が不明であるので断言はできないが、湯舟沢I群に伴うことだけは確実であろう。胎土・焼成なども当地域の土器とは異なっており、搬入された可能性が強い。宮城県地方では近年、青木畑遺跡(加藤:1982)や山王遺跡(須藤:1983a)の内容が明らかにされ、本県の資料を比較する上で大いに役立っている。湯舟沢I類と青木畑式を比較すると、口縁部に隆帯あるいは沈線をめぐらす壺・口縁部がやや内傾する深鉢などは共通しているが、口縁部に大突起を有する、あるいは脚部に透かしのある高環・変形工字文の交点の貼瘤・倒皿形の蓋は無く、変形工字文をもつ小形浅鉢の数が極端に少ない等の相違点が認められる。これらは、谷起島遺跡と湯舟沢遺跡を比較しても同様のことが言える。また、山王III層式と比較すると、磨消縄文手法が少なく、工字文・王字文あるいは垂下文などがほとんど無いことがあげられる。湯舟沢I類土器は一部に青木畑式あるいは二枚橋式土器のような始現期の弥生式土器を含んではいるが、総じてこれらの次の段階に位置するものと考えられる(註6)。他の地域と比較するなら宇鉄II式・山王III層式の一部と併行する、と言えるであろう。

湯舟沢I類土器を出土した住居址のうち6棟が重複関係にある(VII Je—2・VII Jf—1・VII Jf—2の一群〈A群〉とVII Jk—1・VII Jk—2・VII Joの一群〈B群〉)。これら住居址出土の土器を比較すると、

A群：遺構上からみた新旧関係は、古い順にVII Je-2→VII Jf-2→VII Jf-1である。これに土器を比較すると、VII Je-2・VII Jf-2とも口縁部がやや内傾する深鉢があり、波状口縁や球形の胴部をもつ小形の壺がみられ、大洞A'式土器の伝統をより強く残している。VII Jf-1では波状文の高坏脚部、蓋、太い篋描沈線の磨消縄文があらわれる。磨消縄文はVII Jf-2の高坏にもあり、この3棟の出土土器に著しい時間差は認めることができず、極めて近い時間内の土器と考えられる。

B群：遺構上からは古い順にVII Jo→VII Jk-1→VII Jk-2と続く。VII Jo住居址には、磨消縄文をもつ工字文(VII Jo住-2)もあるが、青木畑遺跡や山王遺跡に多いAタイプ(挿図1参照)の変形工字文をもつ小形浅鉢(VII Jo住-1)や他の文様(VII Jo住-5)もある。VII Jk-1には隆帯文や波状口縁の壺(VII Jk-1・2)などもあり、やや古い様相を示している。また、VII Jk-2の高坏の器形・文様も同様であり、この3棟も土器の上から著しい時間差を見出すことは困難である。

その他の竪穴住居址の土器も大きな時間差はなく、これら8棟の竪穴住居址から出土した土器群は、ある一定の時間内に存在したと考えられる。その編年の位置づけは前述のとおりである。

(2) 湯舟沢Ⅱ類土器

湯舟沢Ⅱ類に類似する土器を出土する遺跡としては、花泉町中神遺跡、一関市谷起島遺跡、同草ヶ沢遺跡(遠藤：1978)、大船渡市長谷堂貝塚(草間他：1972)、陸前高田市長洞遺跡(小田野：1982)、水沢市橋本遺跡(伊東：1974)、江刺市沼の上遺跡、紫波町上平沢新田遺跡(吉田他：1980)、矢巾町大渡野遺跡(相原：1979)、玉山村山屋遺跡(小田野：1982)、松尾村野駄遺跡(田井：1978)、一戸町滝野遺跡(関：1980)、同上野遺跡(高田：1985他)、同小井田Ⅲ遺跡(近藤他：1985)、二戸市足沢遺跡(関：1980)、同火行塚・大渕遺跡、九戸村嶽Ⅱ遺跡(平井他：1984)、久慈市上野山遺跡(村上他：1983)などが知られており、奥羽山地を除いて広く県内に分布している。

湯舟沢Ⅱ類土器とⅠ類土器を比較すると、以下の点で変化を認めることができる。壺形土器では、口縁部のみならず体部下半まで施文されたやや大形の器形が出現する。Ⅰ類土器では、1例(VII Jf住-17)のみであったが、Ⅱ類土器ではほとんどに磨消縄文を伴う工字文・波状文・連弧文などが施文されている。このようなモチーフをもつ類例及び完形品は数が少なく、繫Ⅵ遺跡(註7)・谷起島遺跡・長洞遺跡・足沢遺跡(須藤：1983)など、数遺跡が知られているのみである。そのうち、磨消縄文の連弧文(VII Ja-1住-6)をもつ壺は矢巾町清水野遺跡(註8)・同山王茶屋遺跡(小田野：1982)・一戸町小井田Ⅳ遺跡などに類例があり、かつ同滝野遺

跡の浅鉢にも類例があり、北上川・馬淵川流域に、この時期広く分布している。甕形土器は口縁部平縁のものが増加し、Ⅰ類にあった口縁部がやや内傾する深鉢は姿を消し、無文の甕も増加する。Ⅰ類と比較して全体的に大形となる傾向がある。作図した甕のみの数値を平均すると、Ⅰ類では口径22.5cm・高さ27.2cmを示すが、Ⅱ類では、それぞれ26.7, 32.1cmを示す（一部推定復原値も含まれている）。高坏はⅦJi 住居址の資料を除いて、ほとんどが平縁となり、坏部は碗状あるいは鉢状を呈する。多彩なモチーフの磨消縄文・充填縄文が坏部に施文されている。工（王）字文は中神遺跡や谷起島遺跡に、ⅦJi 住居址の一群のモチーフも上記以外に沼の上遺跡・嶽Ⅱ遺跡などに類例がある。器形にこだわらずモチーフのみを見るなら、ⅦJi 住一8は岩手町茂の口出土の壺形土器に（杉原他：1975）、ⅦJi 住一6は陸前高田市山崎遺跡（佐藤他：1984）などに類例を求めることができる。また、蓋とした土器（ⅦIa 住一9）には異論のあるところかもしれないが、当遺跡では連弧文及び刺突文（列点文）を有する高坏あるいは台付鉢が全く無いこと、脚部の形態が高坏としては小さいことなどの理由で、蓋として取り扱うこととした。Ⅱ類においてはまた、台付土器の出現も特徴の一つとなり得る。器形全体を知り得るものはないが、沈線のめぐる2例（ⅦJa—1住一9・ⅦIa 住一33）は台付甕あるいは鉢に、連続山形文が頸部にある例（遺構外—68～70）は台付鉢に、小形の台（ⅦJi 住一12）は不明である。浅鉢・小形鉢とも沈線あるいは縄文のみの施文で、単純化し、かつ同一の器形を示す傾向にある。

Ⅱ類土器を近隣地域と比較するなら、青森県田舎館遺跡、秋田県宇津ノ台遺跡（須藤：1970）宮城県山王遺跡、同寺下圀遺跡（加藤：1968）、同枅形圀遺跡などがあげられる。宇津ノ台式と同様の資料として平行沈線・磨消縄文をもつ壺（遺構外—64）などがあげられるが、刷毛目あるいは篋圧痕文などは見られない。田舎館2あるいは3群に近似するものとして住居址内は少ないが（ⅦIj 住一4・ⅦJa—1住一8他）、遺構外では数例みられる（遺構外—68～73）。甕形土器（ⅦIj 住一4）は井沢式（葛西：1976）あるいは田舎館2群（須藤：1982）と呼ばれているものに近い。井沢式土器併行とすると時期的にやや不都合が生じるが、田舎館2群あるいは枅形圀式土器（山内：1925, 杉原：1936）併行とすれば無理は生じない。類例の少ない資料だけに、今後の検討課題としておきたい。山王Ⅲ式と比較すると須藤氏の山王Ⅲ層の上層の土器に類似するものが多い。また、寺下圀式に類似するもの（遺構外—3）も認められる。枅形圀式に見られるような重層する連弧文・口縁部が強く外反する甕（遺構外—74）・山内博士のいう特殊な縄文（山内：1979）〔直前段多条〕をもつ例（ⅦIa 住一6他）、なども一部は見られるが、一方で列点文を有する甕・長頸壺・細い沈線による変型工字文・渦巻文が見られないなどの相違があるなど、それぞれの地域の土器と一部では共通する特徴を共有するが、異なる点も多い。これらのことは、湯舟沢Ⅱ類土器が、一部を除いてⅠ類土器に継続して製作・使用されたもの

であることを示すものと言えよう。ただ、VII Jc 住居址の甕 (VII Jc 住一6) のように器形・文様ともより新しい要素を含む土器もあるが、他の共伴遺物あるいは竪穴のプランと比較するとII類土器に含めざるを得ない。特に、VII Jc 住居址の一群の多様な甕形土器 (VII Jc 住5～15) は、湯舟沢II類土器の在り方を知る上で重要な意味をもつものと思われる。

(3) 湯舟沢III類土器

湯舟沢III類に類似する土器は大船渡市関谷洞窟(後藤他:1968, 小田野:1982)、水沢市常盤遺跡(伊東:1954)、江刺市兎II遺跡(高橋他:1979b)、紫波町墳館遺跡(三上:1980)、盛岡市繫VI遺跡(上野他:1983)、盛岡市一本松遺跡、同銭神沢遺跡(武田:1978)、一戸町上野遺跡(高田:1985他)、同小井田IV遺跡(柝沢他:1983)などで出土している。これらの遺跡から出土した土器は、「天王山式土器」に比定あるいは認定されている。従来、岩手県においては常盤遺跡の資料が数もまとまっており、多くはこの資料を型式認定の資料として用いてきた。湯舟沢遺跡では、常盤遺跡以上の量が出土しており、組成・器種を知る上で重要な位置を占めている。器種には壺・甕・鉢・高坏・蓋があるが、壺の数量が激減し、大形の各種の甕が主体となる。高坏・蓋も極く少数となり、異形の浅鉢(VII If 住一11)が出現する。甕では深鉢状で口縁部が外に広がるものと頸部を有するものとに大きく分けられる。頸部をもつものの中ではさらに最大径が口縁部にあるものと、胴中央あるいは下半部にあるものとに分けられるなど、バラエティーに富む。また、甕に各種の文様が施文されるのも大きな特徴の一つである。このことは当遺跡のみならず、各地の同時期の甕に言えることであり、特殊な変形工字文(VII Ic 住一6)や、口縁部の連弧文(VII If 住一4他)などは常盤・兎II・小井田III遺跡などほぼ全県下にわたって分布している。主な文様としてこの他に交互刺突文・絡条体圧痕文・結節回転文・附加縄文・連続山形文がある。この他に複合口縁も湯舟沢III類の特徴の一つである。複合口縁をもつ甕は、頸部に無文帯を有するものが多い。

天王山式土器の特徴を簡潔にまとめると、「口縁の突起の発達」・「交互刺突」・「条の縦走する縄文」・「体部文様帯下端の下向き弧文」(中村:1976)などがあげられているが、これらの要素は湯舟沢III類では満たされている。が、その他の文様・器形も存在していることに注目すべき点がある。天王山式土器は東北地方のみならず更に広い分布を有しているが、各地方・地域によって相当の独自性を保っている。宮城県上ノ原A遺跡(佐藤他:1978)や青森県鳥海山遺跡(工藤他:1977)がその好例であり、当遺跡の資料も北上川上流域における天王山式土器の一つの分布圏を示すものと捉えることができる。さらには常盤式と同様な名称、例えば「湯舟沢式土器」と仮称し、本県の天王山式土器の分類や細分の目安とすることも可能である。湯舟沢III類に近似するものに赤穴洞窟(江坂:1953)、一関市浄光沢遺跡(鈴木:1958)、上野B遺跡

〔第Ⅱ群土器（高田：1985）〕などから出土した一群の土器がある。甕形土器以外の器種は類例が少なく、器壁はきわめて薄いのが特徴である。文様は天王山式ほど明瞭ではない浅い沈線間を突く平面的な交互刺突文・体部の、不規則な羽状縄文・体部下端での縄文（撚糸文）の末端がクロスする・あるいは最下部の条が横走するなどの特徴がある。これらの要素は湯舟沢Ⅲ類にはほとんど見られないので、区別して考えるべきであろう（註9）。

6. 小 結

湯舟沢遺跡出土土器をⅠ～Ⅲ類に分類した。これらを組成・器形・文様上で比較すると次の通りである。

組 成：Ⅰ～Ⅲ類とも基本的に壺・甕（深鉢を含む）・鉢・蓋・高坏から成り立っている。

Ⅰ類：それぞれの器種間に数量の偏重は認められず、バランスのとれた組合せとなっている。同時期の他の遺跡と同様、甕が最も多く高坏がこれに続く。大形の深鉢・浅鉢が存在する。

Ⅱ類：Ⅰ類に比して壺が増加し、蓋は減少する。高坏の器形がバラエティに富み坏部がⅠ類よりは浅くなる傾向を示す。深鉢は姿を消し、鉢は小形化し、袖珍土器が目立つ。

Ⅲ類：壺・蓋・高坏とも減少し、大形の各種の甕が主体を占める。甕をそのまま小形化したような鉢は減少し、異形の浅鉢があらわれる。

器 形

壺 Ⅰ類：大形の肩部の張る長胴の壺が特徴的である。胴部に縄文以外の文様をもつ例は極く少数である。胴部球形の小形壺もある。

Ⅱ類：頸部が直立気味で胴部は球形を呈し、最大径が胴中央部のものが多い。器高20cm前後が多く、極端な大形・小形の例はない。胴部に篋描沈線・磨消縄文が多用される。

Ⅲ類：数は減少する。小形壺の他は肩部がゆるやかな器形になりそうであるが、類例乏しく不明である。

甕 Ⅰ類：煮沸具として縄文土器の系統を引く大形の深鉢と頸部をもつ甕とに分けられる。甕は頸部に沈線をめぐらすものが多い。最大径は口縁部にあるもの、肩部にあるもの両方で沈線と縄文以外の文様は無い。口縁部は小さな波状・山形突起・平縁など様々である。

Ⅱ類：Ⅰ類の器形を引き継ぐ器形が多いが、これらの他に頸部から口縁部が長く、且つ外に大きく広がる器形が出現する。縄文をもつものが最も多いが、無文の甕がⅡ類であられる。例外的に頸部に文様をもつ例がある。Ⅰ類と比較してやや大形化し、バラエティーに富む。口縁部は波状・山形などもあるが平縁の例が多くなる。

Ⅲ類：最大径が口縁部にあるもの、肩部にあるもの、胴中央部あるいは下半部にあるものなど様々である。複合口縁あるいは肥厚な口縁の造りが目立つ。平縁が多い一方で山形の小突起、ゆるやかな波状の口縁もある。底部は総じて小さく、安定感に乏しいものもある。胴の張る器形ではやや上げ底で底縁部がやや外側にはみ出す形のものが多い。精製土器のように各種の文様が施文されており、無文の例はない。頸部に無文帯をもつのも特徴の一つである。

鉢 Ⅰ類：甕・大形の浅鉢を小形化したもの・碗状・台付・胴部に段のあるものなど様々な器形がある。大洞A'式の器形を引き継ぐものも多く含まれている。

Ⅱ類：Ⅰ類に比して小形化する傾向にあり、浅鉢・小形鉢は統一性のある器形にまとまっている。袖珍土器がやや多い。

Ⅲ類：異形の浅鉢以外はいずれも小形で、精製有文の碗形・鉢形が多い。

蓋 Ⅰ類：倒碗形がほとんどで、1例東北地方では類例の少ない蒸気口をもつものがある。縄文以外の文様は無い。

Ⅱ類：Ⅰ類の器形の他に、磨消縄文をもつ精製の蓋がある。他の遺跡でも出土しているが類例は少ない。他の蓋とは用途・性格が異なる可能性も考えられる。

Ⅲ類：倒碗形・笠形があるが、数は少ない。Ⅰ～Ⅲ類ともいずれも把手を持つ器形と推定され、把手のない倒鉢形、倒皿形を呈する資料は発見されていない。

高坏 Ⅰ類：山形口縁を呈するものが多く、平縁は少ない。坏部は碗状・浅鉢状・有頸など各種あり、磨消縄文は少ない。脚部は筒形で波状文が大多数を占める。

Ⅱ類：体部文様に磨消縄文・充填縄文などを用いた従来になかったモチーフが見られる。浅鉢状の平縁の坏部が増加し、山形口縁は減少する。Ⅰ類よりは細い筒形の脚もある。

Ⅲ類：破片資料のみで全体を知り得ないが、磨消縄文を伴っている。

文 様

Ⅰ類：変形工字文・平行沈線文・波状文が多く、縄文はLRが多くRLは少ない。高坏・小形鉢の多くは丹彩されている。磨消縄文は少ない。

Ⅱ類：太い篋描沈線による波状文・連弧文・連続山形文・変形工字文・王（工）字文などが、磨消縄文あるいは充填縄文手法により、多彩に用いられている。縄文原体にも特殊な技法が用いられている。これらが施文される器種は蓋の例外を除いてⅠ・Ⅱ類とも壺・小形鉢・高坏に限られている。丹塗りもほとんどがこの器種に集中する。Ⅰ・Ⅱ類の文様の概略は、挿図に示す通りである。

Ⅲ類：交互刺突文・連続山形文・変形工字文・連弧文・絡条体圧痕文・結節回転文などがあり、縄文・捺糸文は斜行・横走・縦走あるいは一部でクロスするなど変化に富む施文をしている。甕・鉢における頸部無文帯も特徴的である。高坏以外の丹塗りは減少する。

以上、湯舟沢遺跡の弥生式土器について述べてきたが、三分類したうち湯舟沢Ⅰ類土器は、一部に二枚橋式的な高坏や青木畑式的な壺も含むが、トータルとして谷起島式に含まれよう（註10）。山王Ⅲ層式と比較するとⅢ層の下層部分出土のグループにより近い様相を示している。このことは時間差を示すのか、あるいは地域性によるものか今後の課題の一つとなろう。湯舟沢Ⅱ類土器は、Ⅰ類土器に後続する。磨消縄文・充填縄文あるいは各種のモチーフなどから山王Ⅲ層の上層部分のグループ・寺下囲式・榊形囲式あるいは田舎館2群の一部に併行する時期に相当する。ただ、ⅦJc 住居址の甕のようにやや後続する器形なども見うけられ、ある程度の時間差をもって存在したことが考えられる。将来的には細分も可能であろう。湯舟沢Ⅲ類土器は、天王山式土器に相当する一群である。ただし、天王山遺跡や常盤遺跡などの資料と共通する点も多いが異なる点も多くあり、このⅢ類をもって「湯舟沢式土器」という名称を提唱したい。湯舟沢式土器以前の土器としては上野遺跡・山崎遺跡・和井内東遺跡などの一群の土器があり、後続する土器としては所謂赤穴式土器が相当するものと考えられる。

湯舟沢遺跡出土の弥生式土器は、岩手県内ではかつてなかった程の質と量をそなえている。これらの遺物・遺構は今後の弥生時代の基礎的研究には欠くことできない資料となることは確実である。特に岩手県の場合、集落の構成や土器の編年など未だ不明な事項が多く残されている。当遺跡の発掘資料が、これらの事項の解明の一助となれば幸いである。

註

- （1）：岩手県埋蔵文化財センターの調査により、弥生時代に属する10棟の堅穴住居址が検出されている（馬場野Ⅱ遺跡一昭和58年度現地説明会資料一による）。本報告は、昭和61年刊行予定。
- （2）：西台畑遺跡や荻ノ口遺跡のような明瞭な稜文ではなく、谷起島遺跡（工藤：1982）

の壺に似た形のモチーフがある。

- (3) : 盛岡市教育委員会の調査による。報告は昭和61年刊行予定。同遺跡はかつて岩手県埋蔵文化財センターで調査した経過がある(上野他:1980)。盛岡市教育委員会の調査は岩手県埋蔵文化財センターの調査区とは若干地点が異なるという。繫VI遺跡については盛岡市教育委員会、八木光則、千田和文両氏に協力をいただいた。
- (4) : この種の土器については青森県埋蔵文化財センター岡田康博氏はじめ、同センターの方々に種々御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
- (5) : (1)に同じ。
- (6) : 岩手県内ではこの時期の土器の細分は未だなされていない。最も古い土器の一群を含めた始現期の検討が必要である。江釣子村蔵屋敷遺跡・一関市谷起島遺跡の一部の資料がそれに相当する可能性が高い。
- (7) : (3)に同じ。
- (8) : 個人蔵。清水野遺跡の縄文時代に関しては、草間の報文がある(草間:1968)。
- (9) : これらの土器は一応「赤穴式」と呼ばれているが、赤穴洞窟の資料は江坂と小田野の紹介した少量の資料しか知られていない。近年、一戸町上野遺跡などで比較的多数の資料が得られているが、組成や文様構成など未だ不明な点が多い。
- (10) : 谷起島式土器については将来細分が可能となろう。最も一般的に用いられる変形工字文にしても、谷起島遺跡などで見られる単位の継ぎ目にある2個一対の貼瘤は、湯舟沢では全く見られない、などの差がある。その際は長坂下遺跡・蔵屋敷遺跡・君成田IV遺跡などの資料が重要な役割を果たすと考えられる。

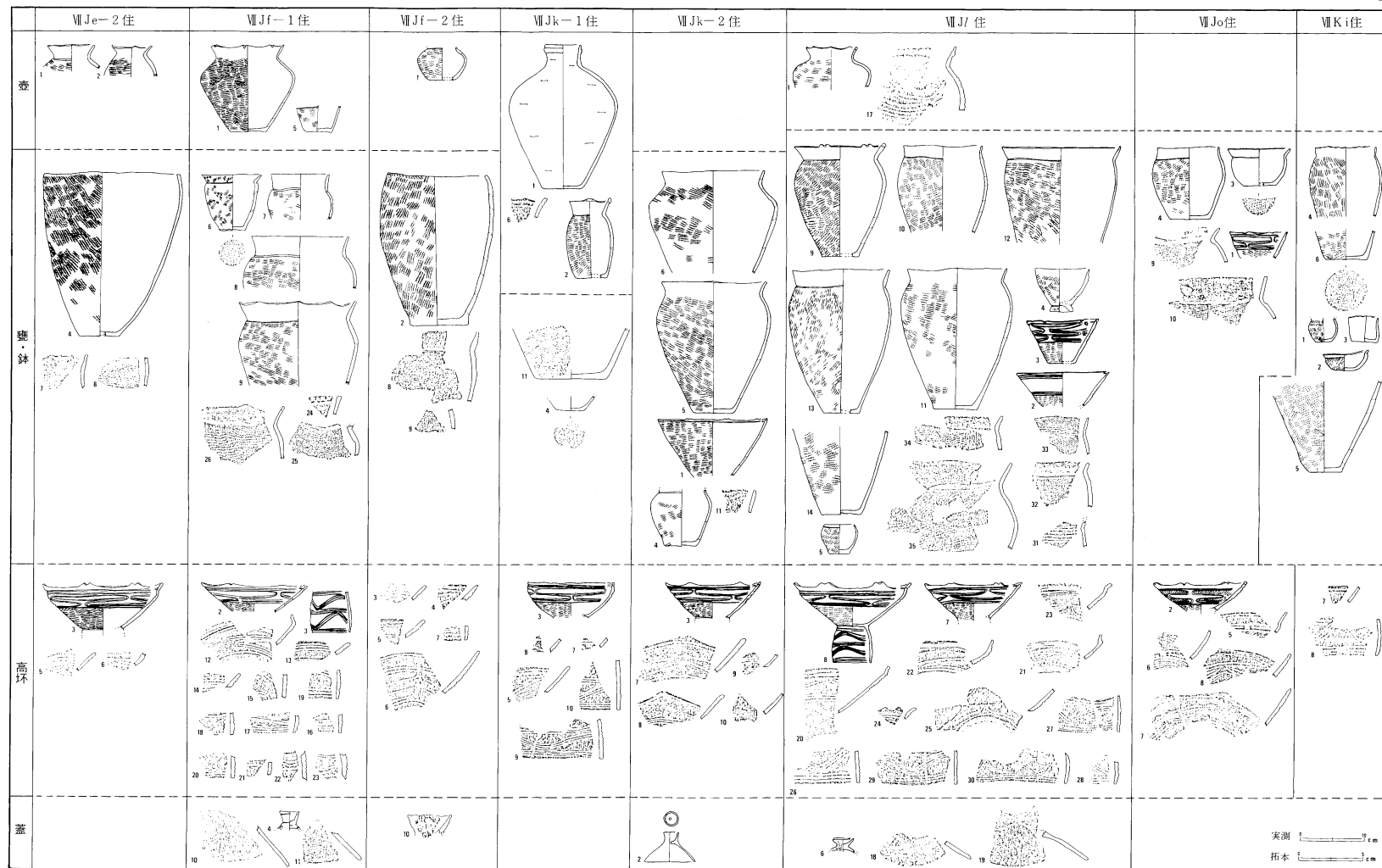
1986・1・16

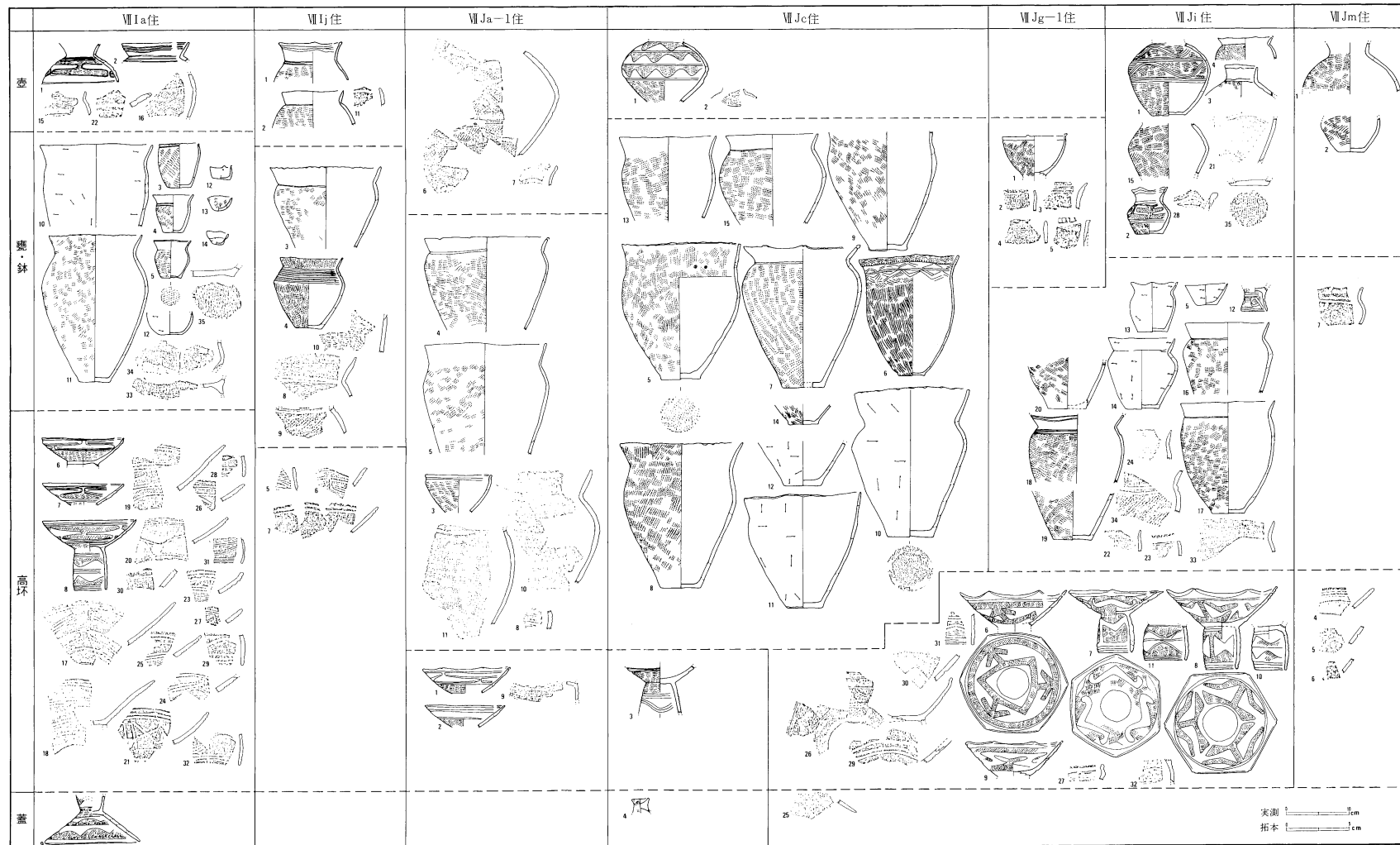
引用参考文献 (五十音順)

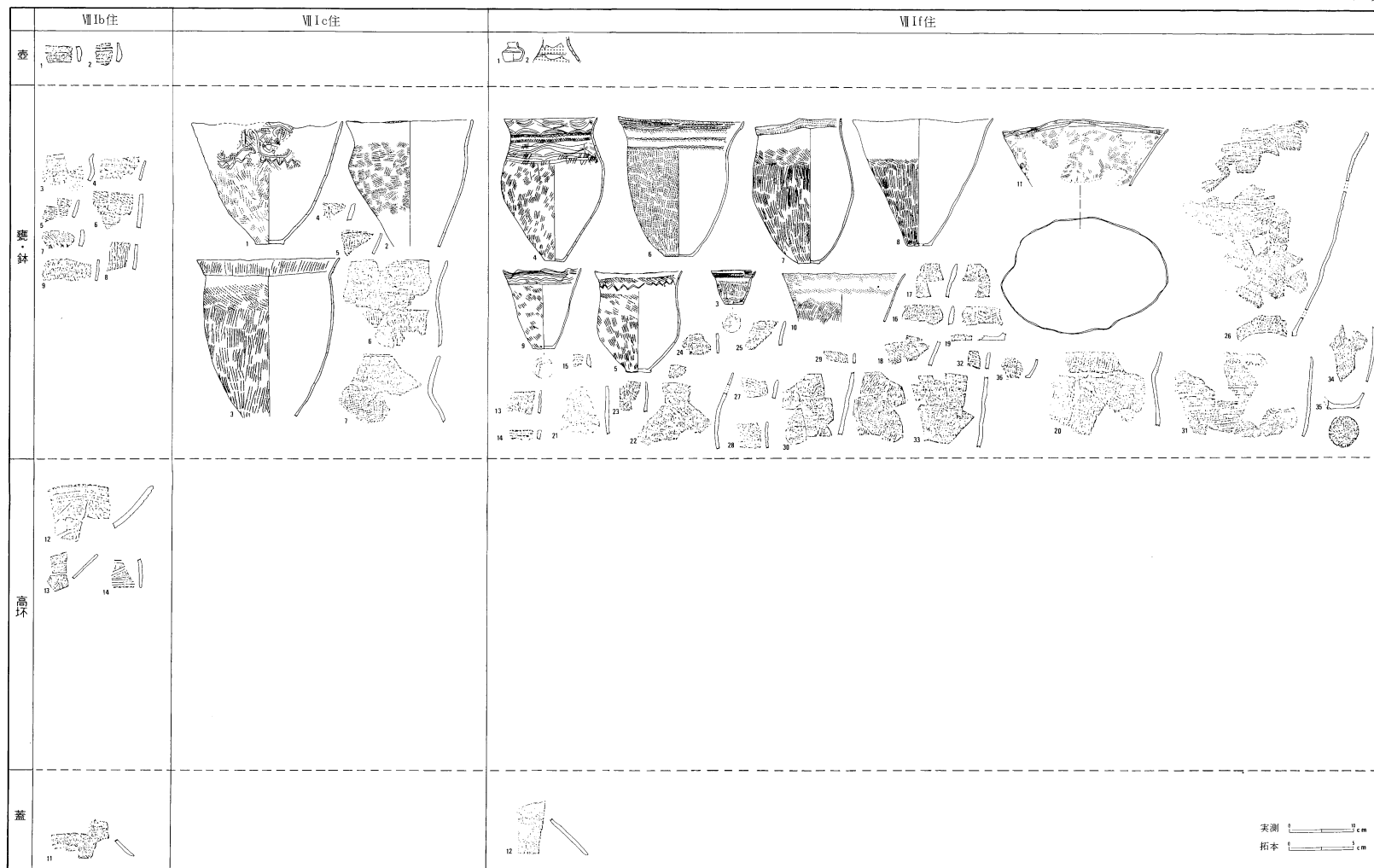
- 相原 康二:1979 「大渡野遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』 PP300~416 岩手県教育委員会
- 伊藤 陽夫:1965 「長坂下遺跡出土の合口土器について」『岩手史学研究』47 PP57~62 岩手史学会
- 伊藤 玄三:1958 「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1 PP11-28
- 同 :1960 「宮城県青木の弥生式遺跡と出土土器」『東北考古学』1 PP 9~23
- 伊藤 鉄夫:1969 「水沢市の歴史—平安以前—」水沢市教育委員会
- 同 :1973 「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会
- 伊東 信雄:1954 「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」『古代学』3-2 PP144~154 古代学協会
- 同 :1960 「東北地方北部の弥生式土器」『文化』24-1 PP40~64 東北大学文学会
- 同 :1968 「東北地方II」『弥生式土器集成』2 PP126~128 日本考古学協会

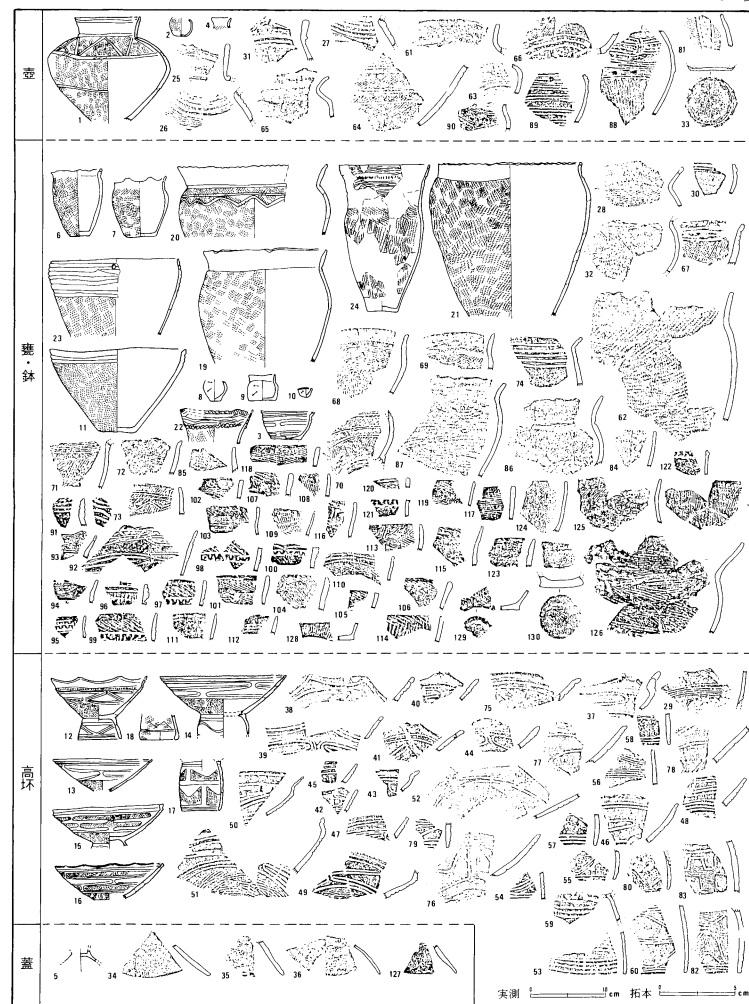
- 同 : 1974 「弥生文化」『水沢市史』1 PP291～346 水沢市
- 岩本 義雄・三宅 徹也他: 1979 「字鉄II遺跡発掘調査報告書」『青森県郷土館調査報告』6 青森県郷土館
- 上野 猛・工藤 利幸: 1980 「繫VI遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』PP543～588 (助岩手県埋蔵文化財センター他)
- 江坂 輝弥: 1953 「岩手県小本川流域の洞窟遺跡」『貝塚』45 PP 1～3 土曜考古学会
- 遠藤 勝博: 1981b 「大淵遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』PP243～327 (助岩手県埋蔵文化財センター)
- 遠藤 勝博・村上 達夫他: 1983 「君成田IV遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター文化財調査報告書62』(助岩手県埋蔵文化財センター)
- 遠藤 輝夫: 1978 「原始時代」『一関市史』1 PP383～457 一関市
- 岡田 康博: 1984 「青森県内の弥生時代終末期の土器について」『遺址』4 PP13～19 成田滋彦
- 奥山 潤・安保 彰: 1963 「十和田湖西南部(小坂鉾山)の弥生式文化とその後続形態(上・下)」『考古学雑誌』49-2 (PP47～62)、49-3 (PP44～55)
- 小田野 哲憲・熊谷 常正: 1979 「第2次谷起島遺跡発掘調査概要」一関市教育委員会
- 小田野 哲憲: 1982 「弥生時代」『岩手の土器』PP115～130 岩手県立博物館
- 小田野 哲憲・高田 和徳: 1983 「上野B遺跡」『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』IV PP173～313 一戸町教育委員会・建設省岩手工事事務所
- 小野田 哲憲: 1985 「和井内東遺跡出土の弥生式土器」『日高見国』PP235～247 『菊池啓次郎学兄還歴記念会』
- 葛西 励: 1976 「井沢遺跡」平賀町教育委員会(青森県)
- 加藤 孝: 1968 「宮戸島貝塚寺下囲地区出土品に見られる弥生文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』PP83～99 宮城教育大学歴史研究会
- 加藤 道男: 1982 「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』85 宮城県教育委員会
- 北林 八州晴他: 1976 「千歳(13)遺跡発掘調査報告書」『青森県埋蔵文化財調査報告書』27 青森県教育委員会
- 草間 俊一: 1968 「岩手県紫波郡矢幅村清水野遺跡」『日本考古学年報』16 日本考古学協会
- 草間 俊一・及川 洵他: 1972 「長谷堂貝塚」岩手教育委員会
- 工藤 武: 1982 「第4次谷起島遺跡発掘調査概報」一関市教育委員会
- 工藤 竹久: 1968 「下北半島尻屋念仏間遺跡」『考古学ジャーナル』23 PP21～23
- 工藤 泰博・鈴木 克彦他: 1977 「鳥海山遺跡発掘調査報告書」『青森県文化財調査報告書』32 青森県教育委員会
- 後藤 勝彦・及川 洵他: 1968 「関谷洞窟」『大船渡市教委社教シリーズ』14 大船渡市教育委員会
- 近藤 宗光・栃沢 満郎: 1985 「小井田III遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター文化財調査報告書85』(助岩手県埋蔵文化財センター)
- 佐藤 信行他: 1978 「上ノ原A遺跡」『一迫町文化財調査報告書』3 一迫町教育委員会 弥生時代研究会
- 佐藤 正彦・小田野 哲憲他: 1984 「山崎遺跡発掘調査報告書」陸前高田市教育委員会・岩手県土木部

- 杉原 莊介：1936 「下野野沢遺跡及び陸前柃形団貝塚出土の弥生式土器の位置に就て」『考古学』7—8
PP370～384 考古学会
- 杉原 莊介・神沢 勇一他：1975 「弥生式土器」『日本の美術』44 小学館
- 鈴木 克彦：1978 「青森県における弥生時代終末期の土器文化」『考古風土記』3 PP29～40
- 鈴木 孝志：1958 「一関市蔵美浄光沢の弥生式土器」『岩手史学研究』28 PP57～58
- 鈴木 隆英：1979 「大明神遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』II PP193～228 岩手教育委員会
- 須藤 隆：1969 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56—2 PP10～67 日本考古学会
- 同：1970 「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33—3 PP72～109 東北大学文学会
- 同：1982 「北辺の弥生文化」『縄文土器大成』5 PP130～134 講談社
- 同：1983 a 「東北地方の初期弥生土器—山王III層式—」『考古学雑誌』68—3 PP1～53
- 同：1983 b 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢』PP309～360 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 関 豊：1980 「岩手県二戸地方出土の弥生式土器二例」『考古風土記』5 PP213～214
- 芹沢 長介：1960 「石器時代の日本」築地書館
- 高田 和徳：1984 「上野遺跡」『一戸町文化財調査報告書』7 一戸町教育委員会
- 同：1985 a 「上野遺跡」『一戸町文化財調査報告書』13 一戸町教育委員会
- 高橋 義介：1981 a 「火行塚遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』PP329～458 (岩手県埋蔵文化財センター)
- 高橋 信雄・三浦 謙一他：1979 a 「力石II遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』PP15～121 (岩手県埋蔵文化財センター)
- 同：1979 b 「兎II遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』PP125～152 (岩手県埋蔵文化財センター)
- 高橋 文明：1983 「蔵屋敷遺跡」『江釣子遺跡群』江釣子村教育委員会
- 高橋 与右衛門・大原一則：1984 「上斗内III・IV・V遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書71』(岩手県埋蔵文化財センター)
- 武田 良夫：1978 「岩手県における弥生式土器について」『考古風土記』3 鈴木克彦
- 橘 善光：1971 「青森県尻屋念仏間の弥生式土器について」『北海道考古学』7 PP39～43 北海道考古学会
- 坪井 清足：1953 「福島県天王山遺跡の弥生式土器」『史林』36—1 PP50～63 京都大学
- 坪井 正五郎：1989 「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』40 PP440～444 東京人類学会
- 枅沢 満郎・小平 忠孝：1983 「小井田III遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書69』(岩手県埋蔵文化財センター)
- 鳥畑 寿夫：1955 「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25 PP37～42 国学院大学考古学会









- 林 謙作・小田野 哲憲：1977 「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会
- 平井 進・石川 長喜：1984 「嶽II遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター文化財調査報告書78』（助岩手県埋蔵文化財センター）
- 三上 昭：1980 「墳館遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III PP221～322 岩手県教育委員会
- 三浦 圭介他：1985 「垂柳遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』88 青森県教育委員会 垂柳遺跡発掘調査会
- 三浦 謙一・佐々木 勝他：1984 「長者屋敷遺跡発掘調査報告書（III）」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書77』（助岩手県埋蔵文化財センター）
- 村上 達夫・佐々木清文：1983 「上野山遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター文化財調査報告書67』（助岩手県埋蔵文化財センター・建設省三陸国道工事事務所）
- 山内 清男：1925 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40—5 PP181～184 東京人類学会
- 同 ：1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1—3 PP139～157
- 同 ：1979 「日本先史土器の縄紋」
- 山口 了紀：1978 「江刺市沼の上遺跡」（助岩手県埋蔵文化財センター）
- 吉田 努・千葉 周秋：1980 「上平沢新田遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III PP129～218 岩手県教育委員会
- 四井 謙吉：1978 「野駄遺跡」『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』PP 2～94（助岩手県埋蔵文化財センター）